川端康成点描

定価　八三〇円

昭和四十七年十月十五日　初版発行

著者　澤野久雄

発行者　増田義彦

発行所　実業之日本社

東京都中央区銀座一の三の九
電話東京(562)四三一一(代)
〒一〇四　振替　三二六番
関西支局　大阪市北区真砂町五三
書協ビル内
〒五三〇　電話(363)一七〇六

印刷　東京研文社
製本　共文堂

© H. Sawano 1972

0095—362231—3214

川端康成
点描

この美しい日本の人

澤野久雄

装幀　中森陽三

昭和二十六年　春
伊豆伊東温泉にて
川端康成氏と令嬢麻紗子さん
後に立つのは著者

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

川端康成点描

目次

李朝など　9
劇場にて　11
夏冬　18
言外に　32
酒場の果汁（ジュース）　36
李朝　42
北欧の日　49
京都にて　51
ストックホルムのホテルで　57
「花のワルツ」　61
光の来る日　75
名作のふるさと　93
京都　93

越後湯沢　105
伊豆　112
体験の占める位置　119
美しい日本のひと　134
二つの夜　147
二つの夜　149
美の終焉　154
『山の音』の空　164
不死の人　169
美は喪われたれど
　悼むまでに到らず　180
オスロの水指　192
芥川賞の時計　199
新しい生命、少女たち　203

描かれた彼女等と、
その背後に居る女性について　216
『凍雲篩雪』　230
旅について　241
舞姫誕生　251
舞姫誕生　253

李朝など

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

劇場にて

その夜の切符を昼近くなって買いに行ったのだから、いい席がないのも無理はない。九分通りは、前売りで捌けてしまっているのである。

E夫妻の舞踊公演会の、第二日目であった。

開演間際に、僕は帝劇の玄関で川端さんを待った。日比谷交叉点の燈火を遠景に、お濠に沿った道が広くて暗い。風が騒がなかったら、そこに裸の街路樹が続いていることにも気がつかなかったであろう。その暗闇から、劇場正面の、そこだけ区切られたように灯の流れる明るみに、オーヴァの襟を立てた川端さんの姿がふっと現れると、僕は思わず人波をわけるようにして近づいて行った。

「少し、見にくいかもしれませんが……。」

「いえ、どこでもいいんです。」
と、川端さんの眼が微笑む。
「昨夜も見たんですから……。」
それは、僕も知っていた。いや、それを知っていたから、余計にいい席を取って置きたかったのだ。二日続けて、同じ人の同じ舞踊を見ようというからには、余程、心惹かれるものがあるにちがいない。僕の目には、さほど情熱の寄せられる踊りとは思えなかったけれど。
席は一階の中ほど、左の壁に近いところだった。腰を下しながら、
「随分、横の方で……。」
と、また言いかけると、
「どこから見たって同じですよ。」
と、振り向いて、川端さんは笑った。その調子に、おや、と、僕は不思議な感じを受け取った。
人と一緒にいると、いつでも相手の気持をいたわろうとする川端さんである。それは、露骨には決して見えず、気づくと、何時の間にかいたわられている。そんな川端さんだから、席の悪さにこだわっている僕に、どこでもいいんです、と言われるのは

分るが、そればかりではない、何か別のものが、その言葉の影からちらと覗いた感じだった。

——川端さんは、今夜、一体何を見る気でいられるのだろう？

と、僕はふと、新しい疑問を抱いた。

丁度、『舞姫』を書いておられる時であった。川端さんは驚くような丹念さで、何んでも見て歩かれた。夕映えの空を描こうと思い立つと、鎌倉から東京に出て、新橋で自動車を拾い、皇居前広場に行き、すぐその自動車をまわして本郷に行かれた。同じ夕映えも、街や木立の様子がちがえば、それぞれ別な情緒を漾わすらしかった。本郷の空があき足りず、自動車はまた皇居前へ返った。その時はもう陽は沈んでしまっていて、川端さんが捉えようとした夕空の一瞬は過ぎてしまっていた。川端さんは翌日、また同じ場所に立って、夕陽の光を眺めるのである。小説の中で、女主人公の『首飾の真珠にも、うつるようであった』と書かれた空の色は、こうして捉えられるのであった。

挿画を描いていた画家が、

「愕きました。」

と、語ったことがある。

「川端さんの風景描写を読んで、その場所にスケッチに行ったんです。そしたら、川端さんの文章の通りです。水も木も、建物も、それからお月さまだって、ちゃんと書かれた所にそのままの姿で出ている。実物を見ながら描く絵より狂いがないんです。」

挿画というものは、場所のはっきりとした風景の場合、虚構は少ない。しかし、川端さんの文章は、――と、その画家は昂奮した調子で喋ったものだ。

劇場の客席は暗く、舞台に落ちるスポット・ライトの中で、E夫妻は踊った。

場内を埋めつくした観客と同じように、川端さんが、じっと視線を踊り手の体に注いでいられるのを見て、僕もしばらく舞台から眼を離さなかった。僕にはその踊りが、二日続けて見るほどのものとはどうしても思われない。僕は考える。

――今夜の踊りが、そしてこの踊りを二日も続けて見たということが、今度の川端さんの仕事の中に、どう生きて来るのであろうか。

休憩時間に、ロビイの紅いソーファに腰を下す。眼の前を往き来する人の群に眼を晒しながら、

「僕は十年、いや十何年か前に、この人たちの踊りを幾度か見たことがありますけれど、その頃からどんな発展をしているのでしょう。今夜、久しぶりに見て、僕にはこの人たちの踊りが、そんなに変ったとは思えないんですけれど……。」

もともと、踊りの好きな川端さんである。今度の仕事を始めるについても、幾人かの舞踊家に会われたし、いくつかの稽古場を見て歩かれた。だから、僕は何時の間にか、踊りに関する解説を、川端さんから聞く積りになっていたのだが、

「そうですね、余り変りませんね。」

と、軽く応じられたと思うと、

「でも、E夫人の脚を見てごらんなさい。十年経てば、たしかに十年だけ、齢をとっていますよ。」

川端さんの眼に、あの、いつも微笑を湛えた眼に、ちらと鋭いものが走る。僕は思わず、くわえていた煙草を口から離した。

僕はその夜その時まで、ずっと踊りを見ていたのだった。が、川端さんは、踊っている人の軀に刻まれた、歳月の跡を見ていたのである。おそらく川端さんにとって、E夫人の踊りは、肉体の動きは、女の哀しい衣裳にすぎなかったのであろう。その衣裳につつまれた女の生命、生命の移り変りが、二日も続けて見るに価したのだと、僕は漸く感じとった。

川端さんの書斎で、仕事机の上に置かれたマイヨールの裸婦を見たことがある。高さ五寸余りのブロンズで、腰を下した女の像であったが、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com